
ムラサキツメクサ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムラサキツメクサ

【Nコード】

N9645C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

札幌のある店に入った私は日本ハムファンのマスターからある話を聞いた。それアイヌに伝わる恋の話だった。アイヌの人達に伝えるお話を書いてみました。

第一章

ムラサキツメクサ

私が北海道に行った時の話だ。札幌のあちこちを歩いてふと喫茶店に入った。

外見は特に何の変哲もない店だった。落ち着いた白い内装でただ店の中のあちこちに日本ハムファイターズの選手の写真やフラッグがあった。見ればあの懐かしいオレンジのユニフォームまであった。「また懐かしいな。しかも」

ユニフォームの番号を見る。二十一だった。

「西崎のか」

「あつ、お客さんわかったみたいだね」

カウンターにいた顔中髭だらけのマスターが私の言葉を聞いて機嫌をよくさせた。額が広くでっぷりと太ってまるでオペラ歌手のパバロッティのようである。というよりか本人に生き写しであった。見ればカウンターには大沢親分の写真が立てられている。完全に日本ハムの中にあつた。

「西崎がわかるなんて通だね」

「パリーグファンですからね」

私はマスターにこう返した。巨大な腹が黒いエプロンに覆われているのが見える。そういうのを見ていると本当に何かアリアでも歌いそうな姿である。

「これ位は」

「じゃあ二十六番は誰かわかりますか？」

「江夏ですよ」

私は笑ってこう言葉を返した。

「前に言っておきますが八十六は神の背番号」

「そうそう」

マスターは私の言葉にさらに機嫌をよくさせる。

「百は永久欠番。オーナーの背番号だから」

「いいねえ。よく知ってるじゃないか」

「思い出はありますから」

私も笑顔で言った。このオレンジのユニフォームをまさかここで見られるとは思わなかったからだ。懐かしい記憶が頭の中に蘇る。

「子供の頃からね」

「球団は何処のファンですか？」

「今はソフトバンクです」

素直に答えた。あくまで今は、であるが。昔は違っていたがもうそんなことは思い出したくもなかった。

「おや、じゃあ完全にライバルですね」

「そうですね。日本ハムも強くなりましたよ」

「色々ありましたけれどね」

マスターの目が優しいものになった。見れば肌が普通の日本人よりも白い。それが髭と合わさって結構目立つ。顔立ちも少しコーカロイドめいて見えた。

「北海道に来てから変わりましたよ」

「ソフトバンクも九州に来てからですし」

「あの名門南海があとまで変わるとは」

「よかったですかね。まあ巨人に潰されなくてよかったですよ」

「全くだす」

マスターは真剣な顔で私の今の言葉に頷いてくれた。私はその間にカウンターに座った。そこでさらに話を続けるのだった。

「巨人こそ潰れるべきです」

「その通りですよ。あそこは独裁国家です」

私は忌々しげに言った。

「球界の北朝鮮です。どんどん惨めに敗れて醜態を晒せばいいんですよ」

「気が合いますね」

マスターは私の巨人叩きに機嫌をよくしてくれた。何を隠そう私

は巨人がこの世で最も嫌いだ。巨人の惨めな敗北を見ることは私にとって御馳走を食べるようなものだ。病み付きになっている。

「パリーグファンでアンチ巨人とは」

「アンチ巨人は僕の絶対の信条ですから」

私はまた笑ってマスターに答えた。

「これだけはね」

「いや、それこそが真の野球ファン」

お世辞で泣くこう述べてくれた。

「そうでなくては。おかげで楽しい気分になりましたよ」

「巨人がお嫌いですね」

「大嫌いです」

予想された返答が返って来て何よりだった。この言葉を聞くと本当に元気になる。

「本当に崩壊して欲しいですね、球界の為にも」

「全くですよ。まあ今日は巨人の試合を見に来たのではなく」

「ソフトバンク対日本ハムを」

「まあそれもありますが」

それだけで来たものではなかった。理由は他にもあった。

「北の美女を見るに」

「ほう、プレイボーイですね」

「いやいや、これは冗談です」

実は観光だ。確かに北海道の女の子にも興味はあるがそれはまたその次だ。とりあえず苦笑いで今のジョークを引つ込めたのだった。

「冗談です」

「ふむ。しかし今の御言葉ですね」

「はい」

「一つ。面白い話を思い出したよ」

マスターはにこにここと笑って私にこう述べた。

「面白い話？」

「実はですね、私はアイヌなのです」

「ああ、成程」

それを聞いて納得した。道理で肌も白いし髭も濃い筈だ。だからといってこうまでパバロツティに似ているというのではないだろうと思っていたが。

「そうですか」

「ええ。そのアイヌの古いお話ですが」

「どういったものですか？」

コーヒーを右手に持って口をつけながらマスターに問うた。白い店の中で黒いコーヒーの香りが漂う。外の涼しげなとその熱さもまた何か絶妙までの対比に思えた。

「恋人のお話ですが。どうでしょうか」

「そついった話は好きです」

私はにこりと笑ってマスターにそう述べた。コーヒーの甘さが口の中を支配しているせいかどうかどうにも言葉まで甘くなっているのがわかる。苦い中の甘さ、それがコーヒーの甘さだった。

「ですから宜しければお話下さい」

「わかりました。それでは」

「ええ」

マスターは一呼吸置いて話をはじめた。私はその話に忽ちのうちに引き込まれていったのだった。まるで夢の中に落ちていくように。

第二章

ある湖の側に二つの村があつた。その二つの村は互いに水を巡つて争つていた。こうした話は昔からよくある話だつた。水は恵みと共に争いの種にもなる。

一方の村にイハマという娘がいた。黒く長い、そしてしなやかな髪が紫にも見える美しい娘で瞳もまるで紫だつた。その紫の美しい娘はいつも夜になると湖へ船を漕ぎ出していた。そうしてそこで月を見るのが日課になつていたのだ。

この日もそうだつた。一人月を見ていた。そこにもう一艘船がやつて来たのだ。

「あの船は」

見れば向こうの村からだ。互いに争っている関係なのはイハマも知つている。彼女は思わず身構えた。

だがそこにいるのは血生臭い男ではなく精悍でありながら凜々しい顔立ちの若者だつた。表情も穏やかで争おうとしているわけではないのは月明かりに照らし出されていた。イハマはそれを見てまづは安心した。

「娘さん」

若者の方からイハマに声をかけてきた。

「貴女はどちらの方ですか？僕はアッパ」

彼はイハマに尋ねると共に名乗ってきた。

「向こうの村の者ですが」

「私はイハマといいます」

イハマも名乗つた。やはり向こうの村の者だがそれでも名乗つたのだつた。

「あちらの村の者です」

「あちらのですか」

「はい」

アッパに対してこくりと頷いた。

「そうです。私達はお互いに」

「けれど。今は誰もいません」

それがアッパの返事であつた。

「誰もですか」

「お月様が見ておられるだけで」

今度は上を指差した。白銀の満月がその優しく淡い光で二人を見下ろしている。その他には誰もいなかった。優しい月だけだつた。

「ほら、他には誰もいませんよね」

「そうですね」

イハマもそれに気付いた。本当に誰もいなかった。

「私達とお月様以外は」

「お月様は黙っていて下さいます」

アッパはそう言つて穏やかで優しい笑みを浮かべた。その笑みで言うのだった。

「ここでのことは。貴女は」

「私は？」

「とても綺麗だ。僕は今まで貴女のような方に出会つたことはない」
「そんな」

イハマはアッパのその言葉を聞いて白銀の光の下で頬を赤らめさせた。それは夜の帳の中でも月の光に照らし出されていた。そうしてその赤らめさせたのをアッパに見せていた。

「私はそんな」

「宜しければですね」

アッパも自分で思った。どうして今日はここまで大胆になれるの
であろうかと。普段の彼からは想像もできない程大胆になっている
のに自分でも気付いたのだ。

「今日はここで二人でお話ませんか」

「二人ですか」

「どうでしょうか。幸いそのお月様以外には誰もいませんし」

「けれど」

イハマは異端は拒もうとする。だがそれは彼女の本心ではなかった。

「それは」

「ですから私の村の者も貴女の村の者も誰もいないのです」

ここでもアツパは驚いた。自分がここまで大胆だとは思わなかったのだ。

「宜しいですよ、それだと」

「貴方と私だけ」

「そうです」

またイハマの言葉に頷いてみせた。

「いいですね。ですから」

「貴方とですよ」

イハマはまたアツパを見た。精悍で優しげな顔はまるで絵のように端整である。月の光に映し出されているその顔を見て彼女も自分の気持ちに嘘をつけなくなった。

「そうです。僕と」

「それでしたら」

遂に彼女の心も揺れた。

「私で宜しければ」

「いえ、それは違います」

ここでアツパは違うと言ったのだった。

「違う？」

「そうです、僕は貴女でないと駄目なんです」
それが彼の心だった。

「だからこそ今こうして。おわかりですか？」

「私でなければ」

その言葉が心に響く。今までなかったことだった。

「じゃあ私は」

「はい」

アップは言う。

「私と共に。今夜は」

「わかりました」

イハマの心の最後の壁が崩れ落ちた。もうそれで決まりであった。

「では。御一緒させて下さい」

「はい、私こそ」

こうして二人はその夜湖の上で過ごした。一晩中互いに語り合った。その夜は瞬く間に過ぎていった。朝が近付くと二人は溜息をつくのだった。

第三章

「忌まわしい朝が来ますね」

「そうですね」

イハマは俯いてアツパの言葉に頷いた。俯くその顔には別れを惜しむ気持ちがはつきりと出ていた。それが今の彼女の心であった。

「お日様が恨めしい」

「僕もです」

アツパも言う。

「どうしてお月様は去って行かれるのか。それを知りたいです」
「ですが」

今度はイハマが大胆になった。

「またお月様は昇ります」

「そうですね」

その言葉にアツパも気付いた。

「必ず。ですから」

「今夜もまたここで」

イハマは自分から言った。

「御会いしたいです。是非共」

「僕もです」

そしてアツパもそれを受けた。断るつもりなぞ最初からなかった。

「では明日の夜もまた」

「二人で。御願いますね」

「はい、二人で」

アツパはその言葉を受け止めた。こうして二人の秘密の逢瀬ははじまったのだった。それはこの日だけでなく幾日も幾日も続いた。そうした日が続いた。二人はいつも夜に会う。そのことを知っているのは二人の他には月だけであった。誰も知らないことだった。

そう、誰も知らなかった。だからこそ二人は会い続けたのだ。だ

がその間に二人がそれぞれいる村は水を巡って関係を悪くさせていた。この湖の水を巡って。

二人もそのことは知っていた。この夜二人は苦い顔で船の上にいた。

「親父が言っていたよ」

最初に口を開いたのはアッパだった。

「もうすぐ戦いになるって」

「戦いに!？」

「そうさ。皆もう武器を用意している」

アッパは忌々しげにイハマに言った。

「そっちもそうなんじゃないかな」

「ええ」

イハマは暗い顔でアッパに答えた。その通りだったからだ。

「そうよ。皆もう血相を変えて」

「そうだろうね。じゃあもう」

「私達も。こうして会うことも」

「できなくなるかも知れない」

アッパもまた暗い顔になっていた。湖に映る二人の顔はこれまでにない程に沈んでいた。

「どうすればいいんだ」

先に口を開いたのはアッパであった。

「このままだと僕達は」

「ねえアッパ」

ここでイハマが言うのだった。

「どんなになっても一緒にいたいわ、私」

「どんなになってもか」

「ええ。何があっても」

小さいがしっかりとした声だった。

「私貴方と一緒にいたい」

「僕だってそうだよ」

それはアッパも同じだった。だから今こうして湖の上で二人いるのだ。できることなら一緒に何時までもいたい、それは偽らざる本音だった。

「けれどもう」

「いえ、できるわ」

イハマのその声には決意があつた。

「絶対に。ここじゃなくても」

「ここじゃなくてもか」

「離れましょう。村を」

イハマは正面を向いたままだった。アッパを見てはいない。だがその心でじつとアッパを見ていたのである。彼しか見てはいなかった。

「それで二人だけで」

「二人だけでか」

「そうよ。いいかしら」

「僕は……」

アッパは少し時間を置いた。それから答えるのだった。

「君さえいればいいから。他には誰も何もいらさないから」

「私もよ。私もアッパが側にいてくれれば」

二人は同じだった。心は何処までも深くつながっていたのだ。もう二人を分けることなぞ誰にもできなくなっていたのだ。例えば死でもだ。

「いいから。じゃあ」

「うん」

アッパは力強く頷いた。

「行こう、二人で」

「ええ」

次の日二人は誰の目の前から姿を消した。それ以降姿を見た者はいないし行方も知れなかった。二人が何処に行ったのか誰も知らなかった。

第四章

「こういったお話です」

マスターは最後まで私に話してくれた。私はコーヒを飲みながらその話を最後まで聞いた。

「如何でしょうか」

「何とも言えませんね」

私は最後まで聞いてまずこう言葉を返した。

「どうにも」

「何故そう仰るのですか？」

「終わりがはつきりしませんから」

少し首を捻ってこう答えた。

「二人がどうなったのか。それがはつきりしないと何にも」

「この話は二つの終わりがあると言われているんですよ」

マスターは私のその言葉に応えてにこりと笑ってこう言葉を返してきた。

「二つね。あるんですが」

「そちらについてもお話して下さいませんか？」

私はマスターにそう尋ねた。

「宜しければ」

「はい、一つはですね」

マスターは私の言葉を受けて話しはじめてくれた。どうやら私がこう言うのを待っていたようだ。何か乗せられた気もするが決して悪いことじゃない。例えそうだとしても乗ることにした。

「湖で心中したんですよ」

「よくある話ですね」

私はその話を聞いてまずはこう返した。

「そうですね。そのまま湖に二人で身を投げたんですよ」

「それで終わりですか」

「いえ、そうではないですよ」

語るマスターの顔は少し寂しげで哀しげなものになっていた。

「二人が身を投げた後湖の周りに花が咲くようになりました」

「花がですか」

「ムラサキツメクサです。ほら、花屋さんでも野原でもありますよね」

「ええ」

私はその言葉に頷いた。確か元々牧草のシロツメクサの亜種だった筈だ。

「あの花が咲き誇るようになったのですよ。それから」

「まるでイハマのような花が」

「その通りです」

私の今の言葉に笑顔になってくれた。

「紫がかつた髪と瞳の色で。お客さんわかってますね」

「女の子を褒めるのは得意なつもりなので」

笑って言った。実際に女の子を褒めるのは好きだ。

「それだけです」

「いやいや、お客さんも隅に置けませんね」

マスターは私の今の言葉に笑いながら話を続けた。

「それならムラサキツメクサの心もわかりますね」

「かも知れません。それです」

「ええ」

今度は私から言葉を出した。マスターがそれを受ける形だ。

「心中した二人は花になった。それが言い伝えられている二人の終わりの一つで」

「はい」

「それではもう一つは何でしょう」

これを聞かずにはいられなかった。そうしてマスターもそれをわかっていたようであった。それを聞かれて顔がまた笑ったからだ。

「もう一つの結末は」

「二人は手に手を取って村を後にしました」

「駆け落ちですか」

「はい。それでですね」

マスターはさらに話をする。

「その二人が通った後にまたしても花が咲いていったのです」

「というムラサキツメクサがですか」

「おわかりですか」

「何となくわかりました」

またコーヒーを一口飲んだ。その苦さの中の甘さを楽しむが今はどうにも切なさも感じられた。こんな味がするとは思わなかった。

「二人の通ったところにムラサキツメクサが咲いていったのですよ」

「そうですか。それで二人はどうなりました？」

私はそれについても尋ねた。

「それで」

「ある場所に落ち着いたそうです」

マスターはそう私に語ってくれた。

「そうして二人で何時までも静かに暮らしたそうです」

「ハッピーエンドですね」

そこまで聞いてこう述べた。

「よかったではないですか」

「それでどちらだと思われませんか？」

私にこう尋ねてきた。

「貴方はどちらも結末だと思われませんか」

「そうですね」

私は一呼吸置いてからマスターに答えた。

「僕はハッピーエンドだと思います」

「ハッピーエンドですか」

「はい、そちらの方がいいですね」

私はまた述べた。

「本当はどちらかわかりませんが」

「私もそうだと思いますよ」

マスターはこう答えてくれた。

「その方が。いいですよね」

「ええ、全くです」

この場合真実よりも幸せの方を取りたかった。だから私はそう思
いたかったのだ。どうやらそれはマスターも同じようであった。

第五章

「恋する二人は結ばれないとね」

「ロマンチストなんですね」

「人間誰だってそうじゃないんですか？」

今の私の言葉には顔を崩して笑ってみせた。まんざらではないよ
うだ。

「だってね。こういった場合はやっぱり幸せにならないと」

「同感ですね」

そして私も。私もマスターと同じロマンチストなのかな、と心の中
で顔を崩して笑った。そう言ってしまうえば誰も彼もが同じだ。マ
スターが今言ったように。

「ところでですね」

「はい」

またマスターの言葉に顔を向けた。

「これからどうされるのですか？この街で」

「可愛い女の子を引っ掛けて遊ぶか観光をしようかと思いましたが
それは少し休ませてもらおうかな、と考えています」

「左様ですか」

「はい、とりあえずのところは」

笑ってそう言葉を返した。多分屈託のない、私にしては珍しい笑
みになっていたと思う。

「というわけで今はこれで」

「お帰りになられるのですか」

「ええ。また機会があればこちらに御伺いさせて頂きます」

「はい、縁があれば」

マスターも笑顔で私に言ってくれた。その一目見たら忘れられな
い大きな笑顔で。

「御会いしましょう」

「では今日はいいい話を有り難うございました」
「いやいや」

お金を置いて店を後にする。そうして街を少し歩いていると花屋の前を通り掛かった。不意に紫色の花が目に入った。

「紫か」

すぐにさっきの話を思い出した。その紫を見てみると。

ムラサキツメクサだった。これはまた奇遇なと心の中で呟いた。

「話を聞いてすぐか」

「はい？」

私の声を聞いたのか店の中から一人の女性が姿を現わした。

「この花でしょうか」

「あっ、いや」

今の言葉を打ち消そうとしたがその女性の顔を見てその言葉を引っ込めることになってしまった。何とその女性というのが。

黒というよりは紫の髪と瞳を持つ美しい女性だったのだ。まるでさっきの話のイハマのように。いや、話に聞いたイハマと全く同じ顔だったのだ。

「何でもありません」

「そうですか」

「ですが」

ここで私はまた花を見た。これこそ何かの縁だと思ったのだ。

「そのムラサキツメクサですね」

「これですね」

「頂けませんか？」

そう女の人に申し出た。

「一つ。実家まで送って」

「運送料は別ですが宜しいですか？」

「はい」

そんなことは問題にはしなかった。むべもなく頷いた。

「御願います、それで」

「わかりました。それでは」

住所を書いてそれと花代、運送料を払った。そうして花を送ってもらった。

「有り難うございます」

「いえ」

その女性の店員さんの御礼に応えた。

「こちらこそ。いい花を見つけることができました」

「はあ」

「ところでですね」

僕は彼女に言うのだった。言わずにはいらなかった。

「ハッピーエンドだったんですね」

「!？」

今の言葉の意味はわからなかったらしい。その整った顔がある首を少し傾げさせた。私はそんな彼女にさらに言うのだった。

「よかったですね、本当に」

「あの、何のことでしょうか」

「いえ、こちらの話です」

そこから先は言わなかった。言っても彼女にはわからないのは承知していたから。

「御気になさらずに。では」

「はあ」

「御幸せに」

最後にこう言って店を後にした。店の中ではもう一人の店員さんが働いているのが見えた。この人の恋人か夫か。ちらりと見ただけだがアップに似ている気がした。

ムラサキツメクサ

完

2
0
0
7
.
9
.
2
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645c/>

ムラサキツメクサ

2010年10月8日15時04分発行